令和５年度 第２学期始業式 式辞

みなさん、おはようございます。

今日から２学期が始まります。皆さんは、どんな夏休みを過ごしたでしょうか。

今日は少し私の話をします。
私の母方の祖父、つまり母の父は、第二次世界大戦で、昭和２０年３月、フィリピンで戦死しました。まだ若くて３６歳。私が知っている情報はそれだけで、遺骨もありません。

祖父には、私の母を含め４人の子供がいました。
一番下の４番目の子、つまり私の叔母になるのですが、祖父が戦死した時は、生まれたばかりだったそうです。
祖父は、さぞ無念だっただろうと思います。

戦後、祖母は女手一つで４人の子供を育てました。
戦後の動乱、物がない時代にどれだけ苦労したか、想像に難くありません。

今年はその祖母が亡くなってから２０年が経ちます。
私は祖母からとてもかわいがってもらいましたが、一度だけ大きく叱られたことがあります。
それは何かというと、
私が小学生の時、「岸壁の母」というテレビ番組がありました。
内容は、戦争に行った息子の帰りを港で待ち続ける、引揚船の帰りを港でずっと待ちつづける母の物語。悲しい番組だったと思います。
その番組を祖母と一緒に見ながら、私は祖母に次のように尋ねました。
「ばあちゃんも、じいちゃんが帰ってくるかと思って、港に行ったん？」
「じいちゃんがおらんかったとき、どう思った？」

何度も興味深くたずねる私に、祖母は、
「そんな話はするな」と言いました。
厳しく叱られたのは、その１回だけだったと思います。
今、私はこの還暦近くになって思うのですが、夫が戦争で死んだと聞かされた時、生まれたばかりの子供を抱きながら、祖母はどう感じたのだろうか。

話を元に戻します。
先週のお盆に、私は祖父にお参りをしようと、熊本県菊池市まで行ってきました。菊池公園に殉国者銘碑があり、戦死した祖父の名前が書かれています。その銘碑にお参りに行ってきました。

到着後、私は、墨で書かれている祖父の名前をハンカチで拭いてきれいにしました。そして静かに手を合わせて、家族の近況を伝えました。
お参りのあと、私は、自分がどうあることが、祖父にとって一番の供養になるかを考えました。

さっきも話しましたが、若く３６歳で、幼い子供を残して戦死した祖父は、さぞ、さぞ、無念だったろうと思います。
だから私はどうあらねばならないのか、を考えました。

そして、その答は、
今、この頂いている生を、一生懸命生きなければならないと思いました。
「今日を一生懸命生きる」、このことが、祖父にとって一番の供養であり、祖父が一番望んでいることだと思いました。

このことは、今、私の目の前にいる皆さんにも言えることだと思います。日々を一生懸命生きることが、ご先祖様の一番の供養になると私は信じます。

さて、今日から２学期です。
気持ちの切り替えはできているでしょうか。特に３年生は、進路選択の重要な学期になります。

どの進路に向かうかはとても大切なことですが、人としてどのように生きるかは、もっと大切なことです。

努力が実る人ばかりであればいいのですが、中には、悔しい思いをする人が出てくるかもしれません。でも、そんな時に、一歩踏み出すのが人生の醍醐味です。

どうぞ皆さん、しっかりと前を向いて、どうあるべきかを常に自らに問い、日々を一生懸命過ごしていって欲しいと思います。

このことをお願いして、２学期の式辞とします。